

## 【翻 訳】

# ジュリオ・カミッロ・デルミニオ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（5）

足 達 薫

## ゴルゴーンたち<sup>1</sup>

内なる人間 [l'uomo interiore] に属する第四段階へと上がることにしよう。内なる人間は、神によって彼自身のイメージ [imagine] および類似性 [similitudine] に基づいて作られた、もともと最後の、そしてもっとも高貴な創造物だった<sup>2</sup>。なお、ここで注意しなければならないのは、ヘブライ語の文献の中<sup>3</sup>ではイメージとして訳されるものが、ケレム [Celem] と呼ばれるということ、そして類似性と呼ばれるものは、デムート [Demut] と書かれるということである。これらの言葉は、ラビ・シメオンの、光輝の書 [illuminator]（すなわち、光を与える者）として知ら

1 これまでに、以下の訳を発表してきた。足達薫「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（1）」、弘前大学人文学部編『人文社会論叢（人文科学篇）』、第7号、2002年、pp.185－205（以後、足達「カミッロ（1）」と表記）；「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（2）」、『人文社会論叢（人文科学篇）』、第8号、2002年、pp.57－76（以後、足達「カミッロ（2）」と表記）；「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（3）」、『人文社会論叢（人文科学篇）』、第9号、2003年、pp. 1－22（以後、足達「カミッロ（3）」と表記）；「ジュリオ・カミッロ『劇場のアイデア』：翻訳と註釈（4）」、『人文社会論叢』、第10号、2003年、pp. 1－18（以後、足達「カミッロ（4）」と表記）。完全な参考文献の指示は、訳出が終わり、まとめる段階で行う予定である。

2 「内なる人間」と「外なる人間」（後者はパーシパエーの階層で扱われることになる）との区別は、『コリントの信徒への手紙二』IV, 16, 「たとえ私たちの「外なる人」は衰えていくとしても、私たちの「内なる人」は日々新たにされていきます」に由来する。

3 ここで、カバラとユダヤ教の関係について確認しておきたい。ユダヤ教では、聖典である旧約聖書の最初の五書を『モーセの五書、ないしトラヘー [神の言葉] [Pentateuch, hamishshah humshe ha-TORAH]』と呼ぶ。これを中核として、旧約聖書の外典や偽典、さらに三世紀から八世紀頃にかけて編纂された『タルムード [Talmud]』という聖書註釈を主とするテキスト（後述）が連なる。カバラ（ヘブライ語では qabalah と表記される）とは、ヘブライ語で「継承」という意味を持つ。宗教的・思想的現象としてのカバラは、一般的には、十二世紀頃から、キリスト教グノーシス派やゾロアスター教、さらに新プラトン主義といった他の宗教・思想からの影響をとりこみながら形成されていったユダヤ教の中の神秘主義思想である。彼らカバラ主義者たちは、『タルムード』を基本的テキストと見なし、解釈を加え、さらに『ゾーハル [Zohar]』（次註を参照のこと）をはじめとする諸文献を研究し、神秘主義的色彩がとて強い信仰および宇宙論を形成していったのである。

続いて、カバラをその典型とするユダヤ神秘主義思想の中核的なテキストである『タルムード [Talmud]』の概要を確認しておきたい。この「タルムード」という題名は、ヘブライ語で「教え」、「学び」といった意味を持つ。三世紀から八世紀にかけて、パレスチナ地方とバビロニア地方で、それぞれ成立した二つの文献であり、現在では『パレスチナ・タルムード』、『バビロニア・タルムード』というように区別される。『パレスチナ・タ

れる『ゾーハル [Zoar]』の中では<sup>4</sup>、次のような解釈をされている。すなわち、ケレムは（いわば）天神的鑄型ないし形 [la stampa, over la forma angelica] を意味し、そしてデムートは神聖な段階という意味を内に持つ。なぜなら、[ラビ・シメオンは] 神は我々の靈魂を諸天使たちがいる優れた段階へと引き上げたばかりでなく、我々の靈魂に神聖な段階をも加えてくれたということを言うおうとしているからである。前述の『ゾーハル』の著者は、さらに、こうも付け加えている。すなわち、後に追放されたある天使が、このことを予期し、嫉妬と自己愛とに駆り立てられ、神聖なる

ルムード』は三世紀頃から五世紀前半にかけて編纂されたものであり、他方『バビロニア・タルムード』はそれから若干遅れて六世紀から八世紀にかけて編纂された。それらを編纂したのは、アモラ（Amorah；ヘブライ語および古代アラム語で「話す人」あるいは「翻訳者」を意味する）と呼ばれた知識人階層と、タンナ（Tanna；古代アラム語で「教える」という意味を持つ）と呼ばれた研究者たちである。

『タルムード』の構成要素は、（1）『ミシュナー [Mishnah]』（200年頃に編纂された、タンナたちの口頭伝承による議論をまとめたテキスト。題名は「反復」および「学び」という意味を持つ）からの引用と、（2）それへの註釈である「ゲマラ」（Gemara：古代アラム語で「完全」ないし「伝統」という意味を持つ）と呼ばれる記述によって構成されている。「ゲマラ」には、『ミシュナー』をめぐる諸問題についての考察と、旧約聖書の人物や歴史的に重要なラビやタンナたちの伝説が含まれている。それゆえ、タンナは、次第に、『タルムード』に登場するユダヤ学者という意味をになうようになっていった。

以上、カバラを典型とするユダヤ教神秘主義の形成については、ショーレムの基本研究を参照した。Gershom Scholem, *Kabbalah, A Definitive History of the Evolution, Ideas, Leading Figures and Extraordinary Influence of Jewish Mysticism*, New York, London, Ringwood, Toronto, Auckland 1974; Gershom Scholem, *Major Trends in Jewish Mysticism*, with a New Foreword by Robert Alter, New York 1995（邦訳は、ゲルショム・ショーレム『ユダヤ神秘思想』山下肇、石丸昭二、井ノ川清、西脇征嘉訳、法政大学出版局、1985年）；Gershom Scholem, *On the Mystical Shape of the Godhead. Basic Concepts in the Kabbalah*, Foreword by Joseph Dan, Translated by Joachim Neugroschel, Edited and Revised, according to the 1976 Hebrew Edition, with the Author's Emendations, by Jonathan Chipman, New York 1991; Gershom Scholem, *On the Kabbalah and Its Symbolism*, Foreword by Bernard McGinn, Translated by Ralph Manheim, New York 1996. また、カバラがルネサンスのキリスト教信仰へ与えた影響については、François Secret, *Les kabbalistes chrétiens de la Renaissance*, Paris 1964 を、さらにジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラの思想のなかに見出されるカバラの影響については、Eugenio Garin, *Giovanni Pico della Mirandola*, Parma 1963 をそれぞれ参照のこと。

『パレスチナ・タルムード』は、イスラム教徒による征服とそれによって余儀なくされた離散によってしだいに重要性を失っていく。他方、『バビロニア・タルムード』は、ユダヤ教の核心の一つとして読まれ続けていく。タルムードとその諸問題についてはさらに以下を参照のこと。箱崎総一「カバラ：ユダヤ神秘思想の系譜」、青土社、2000年（新装版）、pp.48－64。

4『ゾーハル [Zohar]』（後に述べるように、光ないし輝きという意味である）は、カバラの中核としてもっとも重要なテキストのひとつである。ここで、その著者の問題について確認しておきたい。

もともと古代アラム語で書かれていたこのテキストは、1280～86年頃、スペインのカタルーニャ地方の都市ゲロナに突如現れ、ユダヤ人居住区のカバリストたちに衝撃を与えた。その著者は不明だったが、2世紀頃に活躍したタンナであるシメオン・ベン・ヨハイ（Simeon ben Johai）が著者として噂され、伝承された。カミッロの時代まで、その伝統が続いていたことがわかる。事実、このテキストの大部分は、シメオン・ベン・ヨハイが対話者と語りあう対話編によって構成されており、カバラ主義者たちが、このテキストの著者に、古代の偉大なタンナを想定しがったとしても無理はない。

しかしながら、現代のカバラ研究者であるゲルショム・ショーレムは、この著作が、当時、やはりスペインのマドリッドに近いグアダラハラに住んでいたカバラ主義者である、モーセス・デ・レオン（1250年頃～1305年）によって執筆されたことを、緻密な文献学分析と、歴史的事実の卓抜な再検討とを根拠として、ほぼ完全に証明した。『ゾーハル』それ自体には著者同定を積極的に促す要素はいっさいないし、モーセス・デ・レオン自身の

主の意志に反抗する言葉を吐いたのだという<sup>5</sup>。しかし、ヘルメス・トリスメギストスは、『ピマンデル』のなかで、イメージと類似性を一つの同じ事物として、そしてそのすべてが神聖な段階を意味すると捉えており、次のように語っている。「すべての事物の父は、すなわち生命および光であり、彼自身に類似させて人間に命を吹き込み、彼自身の子供としてそれを愛したということを心に留めよ。人間はとても美しかった。というのは、彼は父のイメージを持っていたし、自分自身の形を本当に愛していた神は、作られたすべての事物を彼に与えたからである」<sup>6</sup>。そして、同じ人物が『アスクレピオス』の中で「このように述べている」、「おお、アスクレピオスよ、偉大なる奇跡、それは人間、崇敬すべき、尊ばれるべき動物である。なぜなら、このものは、あたかも自分自身が神であるかのように、神の本性へと変化するからであり、ダイモンとともに生まれたのを知っているがゆえに、ダイモンの種族と通じており、自分自身のなかで、〔人間性とは異なる〕別の部分にある神聖を信じて、人間性という部分を軽蔑するからである」<sup>7</sup>。他のカバラ主義の著述家たちは、類似性は仕事〔operatione〕に関連しているという記述を残しているが、神が自分自身のために仕

---

ほかの著作には逆に『ゾーハル』についての言及はいっさい見られない。他方、しかしながら、デ・レオンは、その著作が、伝説のラビになりすました自分が書いたものにほかならない、ということを匂わせる発言をしたとも伝えられている。現代の研究者たちは、一般に、ショーレムによる著者同定の蓋然性の高さを認めている。ショーレムの研究は以下を参照のこと。ショーレム『ユダヤ神秘主義』、前掲書、pp.205 – 321; Scholem, *Kabbalah...*, cit., pp.57 – 61, 213.

「ゾーハル」とは、ヘブライ語で「輝き」ないし「光」を意味する。日本ではいまだ、このテキストの名称の定訳は定まっていないようである。私は『ゾーハル』として統一した。『ゾーハル』の英語完訳は以下である。Harry Sperling, Maurice Simon, *The Zohar*, 5 vol., London 1931 – 1934. さらに、英語による縮小版2点と、ゲルショム・ショーレムが編集した抜粋版は、『ゾーハル』の概要を知る際の手引きとして有効である。*Zohar, Selections Translated and Annotated by Moshe Miller*, Morristown 2000; *Zohar. The Book of Enlightenment*, Translation and Introduction by Daniel Chanan Matt, Preface by Arthur Green, Paulist Press, New York-Ramsey-Tronto 1983 (以下、*Zohar-Matt* と表記) ; *Zohar. The Book of Splendor. Basic Readings from the Kabbalah*, Selected and Edited by Gershom Scholem, New York 1995 (以下、*Zohar-Scholem* と表記) 。『ゾーハル』の成立についてはさらに以下を参照のこと。箱崎総一「カバラ：ユダヤ神秘思想の系譜」、青土社、2000年(新装版)、pp.200 – 224. さらに日本語では、以下も参照のこと。S・L・マグレガー・メイザース『ヴェールを脱いだカバラ』判田格訳、国書刊行会、2000年(ラテン語版『ゾーハル』からの部分的な和訳が含まれている)。

<sup>5</sup> 『ゾーハル』I, 25a; III, 207c – 208a.

<sup>6</sup> カミッロはここでも、フィチーノによるラテン語訳から引用している。Mercurio Trismegisto, Pimander, I, 12, in *Mercurii Trismegisti liber de potestate et sapientia Dei, Corpus Hermeticum I-XIV*, versione latina di Marsilio Ficino, Firenze 1989, fol. 7r, "At pater omnium intellectus, vita et fulgor existens, hominem sibi similem procreavit, atque ei tanquam filio suo congratulatus est; pulcher enim erat, patrisque sui ferebat imaginem. Deus enim re vera propria forma nimius delectatus, opera eius omnia usui concessit humano." ; Walter Scott (ed.), *Hermetica. The Ancient Greek and Latin Writings which Contain Religious or Philosophic Teachings Ascribed to Hermes Trismegistus*, Shambhala, Boston 1993, p.120; Cf. Brian P. Copenhaver (ed.), *Hermetica. The Greek Corpus Hermeticum and the Latin Asclepius in a New English Translation with Notes and Introduction*, Cambridge 1992, p. 3.

<sup>7</sup> カミッロの原文は以下である。"O Asclepi, magnum miraculum est homo, animal adorandum atque honorandum; hoc enim in naturam Dei transit, quasi ipse sit Deus, hoc demonum genus novit, utpote qui cum eisdem ortum esse cognoscat, hoc humanae naturae partem in se ipso despicit, alterius partis divinitatis

事をさせることを目的として人間を作ったと言いたいかのようである。そして、この意見と聖書は一致していて、後者のなかでは、我々が行う善き仕事は我々のものではなく、神のものであり、我々は仕事の道具に過ぎないということが述べられている<sup>8</sup>。幾人かの修道士たちが、これらの仕事を、永遠の仕事〔opere eterne〕と呼ぶのは、このことに基づいているのである。これについて、パウロは述べている。「いったいあなたの持っているもので、戴かなかったものがあるでしょうか？もし戴いたのなら、なぜ戴かなかったような顔をして高ぶるのですか？」<sup>9</sup>。そして注目すべきことは、聖書が人間について言及する時には、そのほとんどの場合、もっぱら内なる人間〔l'huomo interiore〕のこののみを意図しているということである。このことは、『ヨブ記』と題された、モーセによる書物のなかに明確に見出される。ヨブは語る。「〔神は〕骨と筋を編み合わせ、それに皮と肉を着せてくださった」<sup>10</sup>。これらの言葉によって、そのなかでも特に「わたしを〔me〕」という人称代名詞によって、内なる人間が外なるそれとは異なるものとして理解すべきであることを明らかに示している。プラトンによる『アルキピアデス第一書』の中で、ソクラテスは、人間の本性について議論しながらこの見解に到達している。なぜなら、我々が身にまとう衣服が我々自身ではなく、我々によって使われている事物であるのと同じく、身体もまた、我々自身ではなく、我々によって使われている事物であるからである<sup>11</sup>。このことについては、『創世記』の中でのモーセの言葉が考察されるべきである。「我に型どり、我に似せて、我は人間を造ろう〔Faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram〕」。これらの言葉は、内なる人間以外の何者をも意味しない。そしてそれは真実であり、少し後に付け加えている。「〔人間に〕地を這うものすべてを支配させよう〔Nondum erat homo, qui operaretur in terra〕」<sup>12</sup>。かくして、かつて、超天界において内なる人間は作られたのであり、神は、この地上世界で仕事を行い、神聖な仕事のための道具となることができるように、それ〔内なる人間〕のために土によって身体を形作ってやったのである。そしてそれゆえ、モーセは付け加えた。「神は土〔アダマ〕の塵で人間〔アダム〕を形作った〔Plasmavit

---

confisus." カミッロの記述は、スコットによる校訂版と若干の語形の相違を含んでいる。Mercurio Trismegisto, *Asclepius*, I, 6 a, in Scott (ed.), *Hermetica*, p.294; Copenhaver (ed.), *Hermetica...*, p.69.

8 日本語版聖書では、『イザヤ書』XXVI, 12; 「主よ、平和を私たちにお授けください。わたしたちのすべての業を成し遂げてくれるのはあなたです」; 『コリントの信徒への手紙一』XV, 10; 「神の恵みによって今日の私たちがあるのです。そして、私に与えられた神の恵みは無駄にならず、私は他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実は私ではなく、私と共にある神の恵みなのです」。

9 『コリントの信徒への手紙一』IV, 7. カミッロは引用していないが、IV, 16, 「そこで、あなたがたに勧めます。私に倣うものになりなさい」というキリストの言葉も参照のこと。

10 『ヨブ記』X, 11.

11 プラトン『アルキピアデス』129, e-f. E. おそらくカミッロが参照したと思われるフィチーノによるラテン語訳のプロクロス『アルキピアデス註解』には以下のように記されている。*Proclus in Alcibiadem Platonicum de anima ac daemone*, in Marsilio Ficino, *Opera omnia*, con una lettera introduttiva di Paul Oskar Kristeller e una premessa di Mario Sancierpiano, Torino 1962, p.1927, "Homo est anima utens corpore, ut instrumento."〔人間は道具のようにして肉体を使用する靈魂である〕

12 『創世記』I, 26.



Deus hominem de limo terrae」<sup>13</sup>。この塵は、(多くの人が語るような) 泥芥のことではなく、土の花 [il fiore]、そして (言うなれば) 土のクリーム [il capo di latte] のことであり、それらは純潔だった。なぜなら、それらは、彼の原罪以後のアダムの家族がそれに触れたような穢れには、いまだ触れていなかったからである。この純潔な土は、アデマ [Adema] と呼ばれていたが、そこからアダムという名が引き出されたのである<sup>14,15</sup>。私は次のことをも、口を閉ざす語ろう。すなわち、キリストは、神聖な裁きを完遂するため、原罪を行う前にアダムが持っていたそれに類似する身体の中に、すなわち純潔な土および処女マリアのもっとも純粋な血によって作られた身体の中に入って、すべての人間の罪の浄化者 [purgator] として、その身を差し出したのである。

我々はアダムについての説明へと進んできたが、これらの事柄に加えられるべきことがある。それは、原罪以前の彼が、二つのやり方で、喜びの庭 [l'horto dekke delitie] にいたということである。

---

13『創世記』II, 7.

14 欄外脚注「アダム Adam」。

15 リーナ・ボルゾーニ (Bolzoni, in *ed.cit.*, p.197, nota 10) によれば、このアダムの名前の解釈は、カバラの伝統によるという (Zohar, III, 83b)。この問題については、カミッロは手稿『変容について *De trasmutatione*』(in Lina Bolzoni, *Il teatro della memoria. Studi su Giulio Camillo*, Padova 1984, pp.99 – 106, esp.104) でも論じている。「スピリトゥスを媒介にして、身体と魂は融合および分離を行うのであり、これと同じことを我々は人間のなかにも見出す… [中略] …いかにして神がアダムを作ったのかを見ようではないか。[神は] 最初に土の塵によって身体を作ってやり、その後でそれを感覚的な動物的スピリトゥスに融和させ、次には彼に魂を吹き込み、その魂がすべてを完成させたのである」[ "Così mediante lo spirito se fa la unione e separatione del corpo et anima, et questo medesimo vedemo in l'huomo... Vedemo come Iddio fece Adam, che prima fece il corpo de limositade terra, poi lo organizò de spirito animale sensibile et puoi gli infundette l'anima, la quale lo perfece tutto." ]

この短い論考で、カミッロは、「真の変容」としての神の変容、雄弁術における言葉の変容、そして錬金術の変容のそれぞれの過程のあいだに平行関係があると主張している。また、アダムの創造過程についての言及は、論文の結論部分で語られているため、読者はアダムの魂と身体との結合を、先にあげた三つの「変容」の暗喩として読むことが出来るようになる。錬金術の実践を通じて、墮落以前の「純潔な」アダム (=人間) へと回帰するというカミッロの夢が見て取れるのである。

実際、カバラも錬金術も、それぞれの仕方、で、正統的なキリスト教の教義から抜け落ちていた「男性原理」と「女性原理」の結合によって生み出される世界という観念を引き受ける思想である。しかしながら、カミッロのような人物の中で、それらが同居しているということは、ひとつの難問を提示する。本来、カバラと錬金術とは、その「金」の理解および位置づけにおいて、本質的に相容れないものだったのである。

錬金術では、「金」は、この世界のもっとも高い存在であり、もっとも高貴な存在であり、それゆえ、それを作り出すという目的は、錬金術師たちを精神的・倫理的にも最高の状態へもたらすことを保証する。それゆえ、「金」は、素材としての世界という「女」ないし「母」を变身させる「男」の支配的原理の象徴である。他方、カバラでは、「銀」は男性的で能動的な「授ける力」、あるいは恩寵と愛を与えることの象徴 (その、しろがねの輝きは乳の色を暗示する) として、それに対して「金」は女性的で受動的な「受け取る力」、たとえば流される血や与えられるワインの象徴として考えられたのである。

1520 年頃から、1720 年頃までの 200 年ほどの間に、この本質的には相容れない世界観が、しだいに、そして混乱しながら融合、いや、より正確に言えば混同されて行く。その過程で生じた無数の異形の例のひとつがカミッロである。もっとも、この融合の過程を検討したショーレムの基本文献では、カミッロは扱われていない。ゲルショム・ショーレム「錬金術とカバラ」、同著者『錬金術とカバラ』徳永恂、波田節夫、春山清澄、柴寄雅子訳、作品社、2001 年、pp.20 – 143。カミッロにおいて、錬金術とカバラがいかに「和解」しえたか、という問題に

私は、この喜びの庭を地上の楽園と単純には呼ばない。多くの人がそのように解釈しているが、モーセは決してそのようなことを言わなかったからである<sup>16</sup>。さて、第一のやり方では、彼は超天界の庭にいたが、それは自らの意志によってではなく、神の恩寵をうけてのことであり、そこであらゆる聖なる影響を味わっていた<sup>17</sup>。しかし、原罪を犯してしまったため、彼は前述した超天界の庭から追放された。これはつまりは、すでに述べた諸影響が彼から奪い去られたということであり、身体的に外へ追い出されたということではない。このことはちょうど、もしカエサルの子臣のある者が、彼の君主の寵愛を受けながら、エジプトにおいてこそ自分自身はもっとも寵愛を受けていると考えたなら、彼は君主の家族のなかにいたとすることが出来ようし、罪を犯してしまったならば、彼の寵愛を失い、宮廷から追放されたと言いうことが出来るだろうということと同じである。私がこ

---

ついては今後の私の研究の継続課題とする。

16 欄外註：「地上の楽園 [Paradiso terrestre]」

17 フランチェスコ・ジョルジョ・ヴェネトが、『自作詩およびそれへの註釈』（第五歌）の中で、地上の楽園についてカミッロと比較的よく似た解釈をしていることは興味深い。ジョルジョはここで、『創世記』に記される地上の楽園について、このように註釈している。Francesco Giorgio Veneto, *L'Elegante Poema & Commento sopra il Poema*, Édition critique par Jean-François Maillard, Préface de Jean Mesnard, Milano 1991, Canto V<sup>o</sup>, pp.72 — 3, "Qui risponde alla Xa richiesta, la qual tacitamente fu, dove era piantato'l paradiso della voluttà? E dice, che non l'arbore della vita fosse piantata altrove, che nella terra de' viventi. E qual sia la terra de' viventi, lo dichiara dicendo, che è il verbo divino, fondamento de tutti li fondamenti, e primario fondo de tutti gli viventi, però che in lui noi vivemo e semo, come dice Arato, altre volte da noi allegato. E più dirò, come tocca Giovanni, che tutte le cose del mondo, nel verbo, sono vita, ché in lui vivono, non solamente gli animanti, ma tutti gli elementi, e tutte le cose elementate. E perché in questo verbo tutti i capaci di diletteatione, si ponno diletteare, come esso ne invita in Mattheo all'XI<sup>o</sup> capo, dicendo, Venite a me tutti voi, che seti affaticati, ch'io vi satierò, e contenerò. Però è chiamato orto e giardino di voluttà, e de' piaceri. Vero è che alcuni vogliono, che quel giardino sia piantato in tutti quei luoghi della divinità, quali il Redentore chiama mansioni, dicendo in Giovanni al 14<sup>o</sup> capo, Nella casa del padre mio, sono molte mansioni; ma non voglio per hora andar' più oltre in questa materia, perché la ricerca altri precippii, de' quali questo non è luogo conveniente a parlar. E bastati questa conclusione, che 'l paradiso della voluttà è piantato principalmente nel verbo, e poi in tutte le cose, che pe (sic) rtengono alla divinità." [「ここでは、喜びの庭はどこに作られたのかという、暗黙のうちに発せられた第十番目の疑問に答えがなされる。そして、生命の木は生ける者たちの大地以外の場所には植えられなかったと述べられる。しかし生ける者たちの大地と呼んではいるが、実はそれは神聖なる言葉、あらゆる土台の中の土台、そしてあらゆる生ける者たちの最初の基盤なのである。なぜなら、他の場所で我々によって引用されたアラトスが述べるように、彼〔神の言葉〕の中に我々は生き、存在するからである。そして、さらに言うならば、ヨハネが指摘しているように〔『ヨハネによる福音書』I, 3—4〕、世界のあらゆる事物は〔神の〕言葉の中で生命となるのであり、それゆえ、彼〔神〕のなかには、魂を持つ者だけでなく、あらゆる元素とあらゆる元素化された事物が生きているのである。そして、この言葉の中には、あらゆる喜びの力があるがゆえに、マタイが第十一章の中で〔キリストが〕そのことについて述べているように、喜びを味わうことができるのである。そこではこう述べられている。「疲れた者たちよ、あなた方すべて、私のもとに来なさい。私はあなた方に食べさせ、収容するだろう」〔『マタイによる福音書』XI, 28〕。しかし、それは喜びの庭とか快楽の庭園と呼ばれている。確かに、幾人の者たちは、その庭園が神聖なるあらゆる場所に作られたと考えたがっていて、それはヨハネの十四章の中で〔キリストが〕それを場所〔mansioni〕と呼び、「我が父の家には、多くの場所がある」と述べているからである〔『ヨハネによる福音書』XIV, 2〕。しかし私は今はこれ以上、このことについては話を進めたくない。なぜなら、それは他の諸原則についての探求であり、ここはそれらについて語

のような意見を、すなわち、アダムが追放された庭は超天界の庭園であったという意見を主張したとしても、おどろく人はいないだろう。なぜならば、このことは、かつてのオリゲネスの、後には彼の踏襲者だったヒエロニムスの見解だったからである<sup>18</sup>。もう一つのやり方でアダムが樂園にいたということを語ることは、ヘブライ語ではなく、ギリシャ語の語彙に頼ることになるだろう。そして我々は、原罪以前のアダムはこの〔地上〕世界の純潔な大地にいたのであり、そしてそこで、自分の肉体を原罪によって汚すことなく暮らしているあいだは、地上の樂園にいたと明言しよう。そして、原罪が犯されると、大地は汚れを身につけたので、それゆえ樂園から追放されなければならないのである。したがって、アダムのために作られた世界に、カエサルの子爵に対して生じうることが見舞ったのである。彼はもし罪を犯したならば、まだ罪を犯していなかった彼の家族すべてが汚れを身につけてしまうだろうし、すべての者が、この家族を嫌悪の目で監視するだろう。したがって、アダムが原罪を犯したため、あらゆる元素が汚れを身につけることによって原罪を犯すことになった。そのため、それらの中にある最初の純潔性がもはやなくなるのであり、こうした理由ゆえに、アダムは地上の樂園を追放されたのだと言うことが出来る。

さて、我々の目的を続けるとすれば<sup>19</sup>、我々の中には、三つの靈魂があることを知るべきであり<sup>20</sup>、それらは三つですべてであり、すべてがそれぞれに「靈魂 animo」という共通の名前を享受しているが、同時にそれぞれ個別の名前も持つ。それに従うならば、最も低いところにあり、我々の身

---

るにふさわしい場所ではないからである。そして、このような結論で充分だろう。つまり、喜びの樂園は、まずはじめに〔神の〕言葉のなかに、そして次に神聖に属するあらゆる事物のなかに作られたのである。』]

ここでジョルジョが引用しているアラトス〔紀元前 315 年頃～240 年頃〕は、ギリシャの詩人で、ストア哲学を修めた人物である。現代の研究者ジャン＝フランソワ・マイラルによれば、ジョルジョはここで、占星術を主題とするアラトスの詩『パイノペイア Phainopeia』(紀元前 270 年頃)の 1－5 節を引用しているという (Francesco Giorgio Veneto, *L'Elegante Poema...*, cit., p.73, note 11)。

また、ボルゾニ (Bolzoni, in *ed.cit.*, p.197, nota 11) によれば、このような地上の樂園についての解釈もまたカバラに由来し、カミッロは手稿『われらが主たるイエス・キリストの晩餐についての説教 [Sermoni della cena di Nostro Signore Gesu Cristo]』において、この解釈をより広く扱っているという (cc.12vff)。そこでカミッロは、『ゾーハル』に加えて、『タルムード [Talmud]』も引用しているという。

18 Origene, *In Genesim*, in Migne, *Patrologia Graeca*, 12, pp.99－102. ヒエロニムスの典拠については確認できなかった。

19 欄外註：「我々の三つの靈魂 [Tre anime nostre]」。15～16 世紀のイタリアにおける靈魂についての論争に関しては、以下の研究を参照のこと。根占献一、伊藤博明、伊藤和行、加藤守通『イタリア・ルネサンスの靈魂論』三元社、1995 年。

20『ゾーハル』では、「ネフェス」、「ルアフ」、「ネッサマー」という三つの人間の内的な靈魂が想定される。「ネフェス」はすべての人間のなかにある。それは誕生の瞬間から人間のなかに入りこんで、その動物的な生命力と心理的機能を司る。「ルアフ」は、ラテン語で「アニマ anima」と訳されることが多い。「ルアフ」は、人間が純粋な生命活動を超越して上昇して行く過程に成功したとき、より上のほうへ引き上げられると考えられていた。「ネッサマー」は至高の位置にある靈魂であり、ラテン語では「スピリトゥス spiritus」と訳されることが多い。「ネッサマー」は、「トラー」(Torah：神の言葉)からくだされる諸命令が人間のなかに満ちたとき、より上のほうに引き上げられ、神性および宇宙の諸秘儀を認識する能力を含む認識力を高めるといふ。『ゾーハル』(Zohar, I, 206a; II, 141b; III, 70b.)を参照せよ。さらに詳しくは、ゲルシヨム・ショーレム『ユダヤ神秘主義』、

体にもっとも近いところにあつてそれに同伴するものは、ネフェス〔Nephes〕と呼ばれ、これはモーセからは「生きている靈魂〔anima vivens〕」と呼ばれているものでもある<sup>21</sup>。そして、これはその中で、我々が持つあらゆる感情〔passioni〕を理解するがゆえに、我々はこれを動物と共有している。そしてこれについては、次のように語る際に、キリストが述べている。「私の靈魂は死ぬほど悲しい」<sup>22</sup>。そして別の個所では、〔このように述べている〕、「自分の靈魂を憎む者はそれを失う」<sup>23</sup>。この語彙には、ギリシア語もラテン語も適切に対応しないため、その意味を翻訳して表すことは出来ないものであり、このことは（例を挙げるならば）あの詩篇のなかで示されている。「わが靈魂よ、主を賛美せよ」<sup>24</sup>。聖霊について記したこの著者〔ダヴィデ〕は、あらゆる場所でネフェスという語彙を当てたのだが、我々は共通する名前〔靈魂〕の使用を余儀なくされている。そして、この預言者がネフェスという語彙を用いたのには正当な理由があった。なぜなら、彼は、舌と、そして声を発生させ、もっとも肉に近いところにあるネフェスによって司られるそれ以外の諸器官とによって神を賛美しようとしたからである。中間のところにある靈魂は、理性的なそれであり、スピリトゥス〔spirito〕の名前、すなわちルアフ〔Ruach〕と呼ばれる<sup>25</sup>。第三のそれは、ネッサマー〔Nessamah〕と呼ばれるが、モーセからは息〔spiraculo〕と、ダヴィデ<sup>26</sup>とピュタゴラス<sup>27</sup>からは光〔lune〕と、アウグスティヌスからは上位の領域〔portion superiore〕と<sup>28</sup>、プラトンからは知性〔mente〕<sup>29</sup>と、そしてアリストテレスからは媒介的知性〔intelletto agente〕と呼ばれた<sup>30,31</sup>。

---

前掲書、pp.315 – 321；Scholem, *Kabbalah...cit.*, p.155などを参照のこと。カミッロは、この三つの靈魂のカバラの理論について、『人間の神への向かい方についての手紙 *Lettera del rivolgimento dell'huomo a Dio*』（Giulio Camillo Delminio, *L'idea del teatro e altri scritti di retorica*, Torino 1990, pp.47 – 58）で、より詳しく論じているが、基本的には『劇場のアイデア』と同様の議論である。

21『創世記』I, 30.

22『マタイによる福音書』XXVI, 38.

23『マタイによる福音書』XVI, 25.

24日本語版聖書では、『詩篇』CXLVI, 2.

25 ウェンネカー（Lu Beery Wencker, *An Examination of L'Idea del Theatro of Giulio Camillo, including an Annotated Traslation, with Special Attention to his Influence on Emblem Literature and Iconography*, PhD.Diss., University of Pittsburgh 1970, p.382, note 5）によれば、「ネフェス」も「ルアフ」も、直訳すれば「息」という共通する意味を持つ言葉である。しかし、旧約聖書では、前者が優先的に用いられているという。

26日本語版聖書では、『詩篇』XXXV, 9.

27 ディオゲネス・ラエルティオス（第8巻、第1章、30節）によれば、「（ピュタゴラスは）、人間の魂は、知性（ヌウス）と理性（プレネス）と感情（テュモス）の三つの部分に分けられると主張している」とあるが、「光としての魂」についてのピュタゴラスの思想の典拠を突き止めることは出来なかった。

28 アウグスティヌスによる靈魂についての分析は、『神の国』第13巻第24章に見られる（アウグスティヌス『神の国』（3）、服部英次郎訳、岩波文庫、pp.244 – 258. ギリシャ語の「ブネウマ」が、ラテン語の「スピリトゥス」へと訳された経緯を含めて、当時の代表的な諸靈魂論について、詳しく論じられている。

29 プラトン『国家』436b.

30 カミッロによってアリストテレスに帰属される「媒介的知性」については、足達「カミッロ（1）」、p.198、およびp.205の註52を参照のこと。さらに次註も見よ。

31 カミッロは『劇場のアイデア』を通じて、しばしば、このように、様々な典拠からのたたみかけるような引用の



そして、ネフェスが、誘惑者として働くダイモンを使役する悪魔〔il diavolo〕を持つのと同様に、ネッサマーは、天使を使役する神〔Dio〕を持つ。中間にある哀れなもの〔la poverella:すなわち、ルアフ〕は、これら二つの部分によって刺激される。そして、もし神の許しをえて、それ〔ルアフ〕がネフェスと結合するべく屈服すれば、ネフェスは肉と結合し、肉はダイモンと結合し、そして全身が悪魔へと移行し、変化するのである。このことについて、キリストはこう述べた。「あなたがた十二人は、私が選んだのではなかったか。ところが、その中の一人が悪魔なのだ」<sup>32</sup>。しかし、もしキリストの恩寵によって（他の誰からも、そのような大いなる慈善はもたらされえないのである）、中間の靈魂〔ルアフ〕が、キリストの言葉のナイフによってまるで切り取られたかのようにして、悪事をそそのかされたネフェスから分離し、そしてそのすべてが神聖なネッサマーと結合するならば、ネッサマーは、天使の本性へと移り、結果として、それ自体が神へと変化するのである。これについて、キリストは、マラキのあの言葉、「見よ、わたしは天使を送る」<sup>33</sup>を引用しながら、「初めから〔ab initio〕」、そして「〔キリストが〕生まれる前から〔ante secula〕」<sup>34</sup>、神聖な預言を授かって天使へと変身していた洗礼者ヨハネのことを述べようとしているのである。私はキリストの言葉のナイフについて言及したが、それは一振りのみで、低い靈魂〔ネフェス〕を理性的な靈魂〔ネッサマー〕から切りとるのである。我々は、後者〔ネッサマー〕はスピリトゥス〔spirito〕の名前を持つと先に述べたが、これについてパウロは、こう述べた。「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな諸刃の剣よりも鋭く、スピリトゥスと靈魂とを、そして間接と骨髓とを切り離すほどに刺し貫いて、心の思いや考えを見分けることが出来るからです〔Vivus est sermo Dei, et efficax, et penetrantior omni gladio ancipiti, pertingens usque ad divisionem animae et spiritus〕」<sup>35</sup>。そして、『創世記』の中の、上に挙げたモーセの言葉の中に、我々が、三つの靈魂それぞれを異なる名前によって認識するためには<sup>36</sup>、「我は人間を造ろう〔Faciamus hominem〕」<sup>37</sup>と語ったときには、彼は理

---

連続をしてみせる。このことは、カミッロが、ルネサンスの人文主義に典型的な「古代神学 Prisca Theologia」の思考パターン（古来の様々な著述家たちが、言葉こそ異なるにせよ、宇宙と人間についてのキリスト教的な真実を語っていると見なす）を共有していたことを明らかに示している。この重要な概念については、D. P. ウォーカー『古代神学：十五―十六世紀のキリスト教的プラトン主義研究』榎本武文訳、平凡社、1994年；Frances A. Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, Chicago and London 1991, esp. pp. 1 – 43; 伊藤博明『ヘルメスとシビュラのイコノロジー：シエナ大聖堂鋪床に見るルネサンス期イタリアのシンクレティズム研究』ありな書房、1992年、とくに pp.57 – 151；伊藤博明『神々の再生：ルネサンスの神秘思想』東京書籍、1996年、とくに pp.214 – 254；については、たとえば、『創世記』II, 7と、アリストテレス『靈魂について』III, 4 – 6, 429 – 430c を比較せよ。

<sup>32</sup> 日本語版聖書では、『ヨハネによる福音書』VI, 71.

<sup>33</sup> 『マラキ書』III, 1.

<sup>34</sup> つまり、洗礼者ヨハネはキリストの先覚者として、キリストが降臨する前から、ルアフをネッサマーへと結合させ、天使の本性へと至っていた、という意味である。ウェンネカー（Wenneker, *An Examination of L'Idea del Teatro...*, cit., p.297）は、「ab initio」を「聖変化の後に〔after consecration〕」と訳しているが、この文脈ではあまり適切ではないように思われる。

<sup>35</sup> 『ヘブライ人への手紙』IV, 12.

<sup>36</sup> ウェンネカーの英訳（Wenneker, *An Examination of L'Idea del Teatro...*, cit., p.297）

性的な魂〔ルアフ〕を意図していたことに気づくべきである。そして、「それ〔人間〕に生ける靈魂を授けた〔posuit eum in animam viventum〕」<sup>38</sup>と語ったときには、ネフェスのことを意図していた。そして最後に、「〔神は〕彼〔人間〕の鼻に生命の息を吹き込んだ〔flavit in nares eius spiraculum vitae〕」<sup>39</sup>と語ったときには、ネッサマーを意味しようとしていたのである。私は、これらの引用のうえに、『ゾーハル』の著者の意見を付け加えずにはおられない。すなわち、ネフェスは、ある種の模像〔simulachro〕、あるいは我々の影〔ombra nostra〕なのである。それはつねに〔死者の〕墓〔sepolchri〕から離れることなく、夜だけではなく、昼のあいだでも、神によって目を開かれた人たちによって目撃される。そして、前述の著者は、聖書の意味を解明するべく、七人の仲間と一人の息子とともに、四十年のあいだ、隠遁生活を行ったが、ある日、彼の神聖で大事な仲間の一人がネフェスを分離させ、そのため〔ネフェスが〕彼の頭の後ろに影となって現れるのを見たと言っている。そして、この事態を見て、これは彼の死期が近づいていることを告げるものであるということに気づいたが、断食と説教〔orationi〕を重ねることによって、頭から分離してしまった前述のネフェスが彼の身体に再び結び付けられ、生きる仕事の終わりまで、結合し続けるという僥倖を、神から得たという<sup>40</sup>。この記述〔luogo〕を見ると、私は、ウェルギリウスが、マルケリウスの死が近づいたことを知る際には、これ〔ネフェスの頭からの分離〕を利用したと<sup>41</sup>、そして、ヘブライカバニロニアであるかに関わらず、カバラ主義者たちはこのような秘密〔secreto〕を理解したと考えざるをえないのである<sup>42</sup>。

続けて、前述の『ゾーハル』の著者は、このネフェスは胎児〔embrione〕の形成以前から存在するが、ルアフは出産ののち七日目にならないと身体の中に入り込まないということ、そして、それゆえ神は、八日目、つまり理性的な靈魂〔ルアフ〕がその中にすでに入った後の日に、新生児が彼のもとに奉献し、割礼を受けるべきだと命じるということを述べている。そして、ネッサマーは三十日目まで入らないが、割礼までそれほど長いあいだ待つ必要もないのである。というのは、それ〔割礼〕には、原罪を犯しうる靈魂〔ネフェス〕と原罪を犯させうる靈魂〔ルアフ〕以外は関与する必要がなく、原罪を犯しえない神聖な靈魂であるネッサマーは必要ではないからである。そして、次の一節では、プロティノスもこれに同意しており、第三番目のもっとも高い靈魂のことを説明しようとして、このように述べている。「靈魂には原罪も罰も生じない〔In anima non cadit peccatum, neque poena〕」<sup>43</sup>。アリストテレスのすばらしい天与の才能は、内なる人間の中にあるもう一つの

は、「そして、『創世記』のなかの……認識するため」という文章を意識し、モーセという言葉を省略している。参照する際には注意されたい。

37『創世記』I, 26.

38 同上。

39『創世記』II, 7

40『ゾーハル』III, 13b.

41 ウェルギリウス『アエネ이스』VI, 854.

42 パレスチナ系のカバラ主義者もバビロニア系のそれも、ともに、この「ネフェスの頭からの分離」の秘儀を知っていた、という意味である。

三重性について考察する労苦を厭わなかったが、その中には彼は第三番目のもっとも高い靈魂しか想定しない。そのかわりに、彼は、我々の三つの知性〔tre intelletti nostri〕については博学な議論を行っている。彼は、その一つを、可能的知性〔l'uno possibile〕と呼んでいるが、これを言い換えれば、我々のラテン語では受動的知性〔l'uno...passibile〕であり、俗語では天与の才能〔ingegno〕であり、他方、キケロによって知性の道〔intelligentiae vis〕と呼ばれたものである。〔内なる人間の中に〕持たれているもう一つの知性は、実践的知性〔intelletto pratico〕であり、これは、すでに入手したということ、および所有することを意味する<sup>44</sup>。第三のそれは、媒介的知性〔intelletto agente〕であり、その力によって我々は〔何事かを〕理解するのである<sup>45</sup>。そしてこの方向に沿って、聖トマスは、媒介的知性が我々の中にあることを証明しようとして、もし私の記憶違いでなければ、我々の視覚の力、そして、我々の中にあつて眼に残像として反映される炎の光を例に挙げている<sup>46</sup>。我々がそれ〔炎の光の残像〕を、どちらかの眼を指でこすることによって、回転する炎の車輪と似ているものとして見るのがとてもよくある。その燃える回転によって、しばしば、我々が、暗い夜に目覚めて眼を開いても、部屋の中にある事物を、ほんのわずかであるが見て識別するが、その回転はその後には衰弱し、次第に活力を失っていくということが起こる。したがって、一つの眼の中に我々は見る力、見ること、そして我々に見させる車輪を持っており、それと同様に、我々の中には、理解することが出来る知性、すなわち天与の才能、あるいは知的能力〔l'intellettiva capacita〕、理解する知性、すなわち実践的知性、そしてさらに、媒介的知性、すなわち我々に理解させる知性がある。先に我々が述べた炎の車輪は、ティベリウスの眼の中では、とても大きくとても強いものとなったため、彼は部屋の中で、夜通し、諸事物をたくさん識別したと記述されている<sup>47</sup>。だとすれば、他よりよく見える人も、よく見えない人もいるということになる。そして、アリストテレスは、観相学者になった際、誰か他人の眼に自分の眼をすえて凝視するのが難しい場合には、その光は未来の君主を意味すると述べている<sup>48</sup>。これに関連して、幾人かの古代人が、イエス・キリストの両眼もまたそのように作られていたと書き残している。しかし、シンプリキオスは、この媒介的知性が結局のところは我々の外にあるということを誇示し、証明しようとしながら、それは外にあるほかになく、ちょうど、太陽が視覚の力の外にありながら、なお、それ〔視覚の力〕は前述の太陽を見るということと同様である、と述べている<sup>49</sup>。したがって、我々の健康な眼の中には

43 『ゾーハル』 I, 81b, 226a-b; プロティノス 『エンネアーデース』 I, 1, 12; I, 8, 4.

44 要するに、後天的な学習によって得られる知識を司る知性という意味だろう。

45 アリストテレス 『靈魂について』 III, 4 – 6, 429 a – 430c; Cicerone, *De finibus bonorum et malorum*, v, 32.

46 眼を閉じたときの残像のことを意味している。以下を参照せよ。San Tommaso, *In Aristotelis librum de anima commentarium*, II, 9, 734. なお、この個所では、たしかに、媒介的知性が独立して存在すると主張する人々に対する反論が展開されているが、カミッロが引用するような太陽と視覚の例などは用いられていない。

47 プリニウス 『博物誌』 XI, 143.

48 偽アリストテレス 『観相学』 VI, 811 b.

49 シンプリキオスは紀元後6世紀の哲学者である。彼はアリストテレスの著作への註釈を通じて、プラトン主

見る力と、時には同様に見ること〔il vedere〕がありながら、見させること〔il far vedere〕は太陽に、あるいはその代理物〔vicario〕のなにがしかに属していて、眼の外にあるということと同じように、我々の内なる人間の中には、理解する力、すなわち可能的知性ないし受動的知性、そして実践的知力がありながら、媒介的知性、すなわち神聖なる光線、天使、あるいは神自身は、我々の外にあるのだ。シンプリキオスのこの意見は、聖書によって、とくにダヴィデのあの一節によって、よりよく証明されるように思われる。「私はあなたに知性を与え、行くべき道を教えよう」<sup>50</sup>。したがって、もし神がそれ〔知性〕の付与者だとすれば、時として、あるいは常に、〔知性の〕剥奪者でもあるのだ。このことについて恐れながら、ダヴィデはこう述べた。「あなたの聖なる靈魂を私から取り上げないでください」<sup>51</sup>。そして、別の箇所〔『マタイによる福音書』〕では、永遠の〔知性の〕剥奪についてこのように記されている。「おまえたちの家は見捨てられて荒れ果てる」<sup>52</sup>。したがって、この媒介的知性、ないし神聖なる光線は、我々の外にあり、神の手中にあるということになる。この〔媒介的〕知性を、神について無知な哲学者たちは、理性〔ragione〕と呼んだが、彼らが言うには、それによって人間が動物から区別されるという。しかし、確かに人間は理性的と呼ばれ、あるいはより正しくは、知性的であり、動物のあいだにあって唯一、この媒介的知力を使用しうる存在である。しかし、人間にそれ〔媒介的知性〕を与えることが神のお気に召さないときには、それなしでなんとかやっていく者は、その内部では動物と変わらなくなるのであり、これについては『詩篇』の中で書かれている。「人間は、知性がなければ栄華のうちに留まることは出来ない。屠られる獣に等しい」<sup>53</sup>。この箇所と、『黙示録』におけるとても難解な〔oscurissimo〕一節が一致している。「数字は人間であり。また数字は獣である。獣の数字は666である〔Numerus hominis, numerus bestiae; numerus autem bestiae sexcenti sexaginta sex〕」<sup>54</sup>。なぜなら、媒介的知性の到来によって1000まで達する数が、啓示を授かった人間〔l'huomo illuminato〕の数だからである。そしてそれゆえに、『雅歌』のなかでは、話しかける相手に慈善を施す際に、「銀1000をあなたに、ソロモンよ〔Mille tibi Solomoh〕」と、ヘブライ語で述べられている<sup>55</sup>。これは次のような意味である。すなわち、「私はあなたに人間の形のみならず、神聖な光をも望むのである」。このことにより、私が、このうえなく優れた我が君主<sup>56</sup>に挨拶するときには、こんにちとは言うかわりに、「銀1000をあなたに」と言うだろう。しかし、これらの数については、また別の機会に述べることに

---

義とアリストテレス主義の対立を和らげることに尽くしたという。

50 日本語版聖書では、『詩篇』XXXI, 8.

51 日本語版聖書では、『詩篇』L, 12.

52 『マタイによる福音書』XXIII, 38 – 39.

53 日本語版聖書では、『詩篇』XLVIII, 13.

54 『ヨハネの黙示録』XIII, 18.

55 『雅歌』VIII, 12.

56 この『劇場のアイデア』の原型となった講義を行った相手、デル・ヴェスト公爵すなわちアンドレア・ドーリアのことである。

57 カミッロがここでのめかしている神秘主義的数字論についての著作は書かれなかったか、あるいは書かれた



したい<sup>57</sup>。この意見には、彼の黄金の枝について記した際のウェルギリウスも同意するように思われる<sup>58</sup>。それ〔黄金の枝〕は樹木とは異なる物質によって造られており、それを手にするには、人間の意志のみでは足りないのである。このことは、黄金の枝が人間の外にある事物であり、神の好意こそがこの知性という恵みを我々にもたらすにふさわしいことを誇示している。さて今や、我々の劇場のなかの諸イメージへと話を進めるべき時だが、我々がこの扉へ置こうと考える神学的象徴のみならず、私の劇場のすべてのイメージに関連する、ある一つの事柄について語ったほうがよいと思われるので、最初にそうしておくことにする。

さて、古代人たちのもとでは、親愛なる弟子たちに深遠な教説を教え、示した、あの哲学者当人たちが、それら〔教説〕を明確に語ったうえで、それらを寓話によって覆い隠すのが慣習となっていた。それは、そのように覆いをすることによって、それら〔教説〕を秘密〔secreto〕のまま保ち、世俗化させないためだった。この慣習は、ウェルギリウスの時代にまで続いた。彼は、博識なシレノス〔の歌〕のなかで、その名〔シレノス〕のもとに、シローをして、クロミスとムナシュロスに、つまりウァールスとウェルギリウス自身に、この世の諸原則を歌わせている、つまり明確に示させているのである<sup>59</sup>。そして、彼が歌い終わると、前述の慣習を知らない読者にとってはとても奇妙に思われるもの、すなわち寓話の中に入っていくのである。私は三つの靈魂と三つの知性（すなわち、内なる人間に属する諸事物）の秘密を解明してきたが、続いて、そのように偉大な哲学者たちを真似て、私は、それらが俗化しないように、しかし同時に記憶を呼び起こすように、繊細な象徴によってそれらを覆い隠すことにしよう。さて、ギリシャの諸寓話の中で、ゴルゴーンたち〔le Gorgoni〕と呼ばれる、盲目の三姉妹について読むことが出来る<sup>60</sup>。彼女たちは、彼女たちのあい

---

としても現在に残っていない。

58 ウェルギリウス『アエネ이스』VI, 135.

59 ウェルギリウス『牧歌』VI. 13（シレノスの歌）。ウェルギリウス『（新装版）牧歌・農耕詩』河津千代訳、未来社、1994（1981）年、p.116、「さあ、歌い始めよう、若者のクロミスとムナシュロスは、洞窟の中に横たわって眠るシレノスを見た」。なお、ボルゾーニ（Bolzoni, *in ed.cit.*, p.198, nota 38）は、『農耕詩』を典拠としているが、誤りである。

カミッロによるこの詩の解釈は意外なものである。これを検討するためには、ウェルギリウスの『牧歌』第6歌、「シレノスの歌」（紀元前三九年春に書かれたと考えられている）の具体的な意味を考察しなければならない。先の引用部におけるシレノスと二人の若者の逸話の前に、ウェルギリウスは、紀元前四一年には北イタリアの土地収容委員をつとめ、この詩が書かれた紀元前三九年に執政官に選ばれたアルフェヌス・ウァールスにこの詩を捧げる意図をほのめかし、直接語りかけている。紀元前四一年、オクタウィアヌスの命を受けて、北イタリアの土地を次々と没収しはじめたウァールスによって、ウェルギリウスもまたマントヴァの所有地と家を没収される。彼はその取り消しを求めるが、その見返りとしてなにか仕事をしたと考えられている。ところが、実際に尽力したのはウェルギリウスの友人であるコルネリウス・ガルスであり、紀元前三九年の初頭に、ようやく土地没収についての諸問題が解決した。そのため、「シレノスの歌」（六四行目以降）では、ガルスが詩の女神と、アポロンに仕える合唱隊とによって栄誉を授けられたと歌われているのである。つまり、この詩の真の献呈対象はガルスなのである。他方、ウァールスはこの年、同時期に、執政官へと地位を上り詰める。以上のように、この「シレノスの歌」は、ウェルギリウスによる、政治家への皮肉と友人への感謝を伴わせた、戯れの性質を有しているという解釈が広くなされている。

これに対して、カミッロの解釈では、シレノスは同時代のエピクロス派の哲学者シローに、クロミスとムナシュ

だで、たった一つの交換可能な眼を共有していた。そのため、その眼をお互いに貸すことが出来たし、眼を持った者は、それを持つことによって見る事が出来た<sup>61</sup>。彼女たちの象徴の中に、上で解明された真実についての秘儀〔il misterio〕すべてが横たわっているし、それは、神聖な光線は〔我々の〕外にあり、我々の中にはないということを我々に理解させる。さて、このゴルゴーンたちのイメージは、第四の階層の秩序のすべてを覆い隠すだろう。そして、その下には、内なる人間に属する諸事物を、それぞれの惑星の本性に従って、含むだろう。

## 《月》<sup>62</sup>

さて、それらの扉の特徴へと進もう。月のゴルゴーンたちのもとには、蟹座と獅子座のあいだにあ

---

ロス、友人のクインティリウス・ウォールスとウェルギリウス自身に見立てられているという。実際、ルクレティウスの『事物の本性について』を読んで以来エピクロス派の哲学に関心を持っていたウェルギリウスは、土地没収事件があった紀元前 41 年、それまでの目標だった弁護士道の道をあきらめて、ナポリにあったシローの学園に参加している。そしてその際に、クインティリウス・ウォールスが同行していたとも伝えられている。したがって、カミッロが述べるように、シレノスと 2 人の若者を、尊敬する哲学者と自分と友人の見立てとして歌った可能性はあるかもしれない。そして実際、宇宙の構造と万物の創造についてのシレノスの歌 (25～40 行) の後、たとえば「パーシパエーの、真っ白な牡牛への熱情を鎮めようとして」(46 行)、あるいは「金の林檎に眼を奪われた乙女のこと」(61 行) (求婚者に徒競走を挑んだ王女アタランテは、金の林檎を投げてそれを拾わせる作戦に出たメラニオンという男についに負かされる) といった「寓話」へと進んで行く。

しかしながら、そのような「見立て」(それがなされていると仮定してだが) を、読者はどこまで理解しえたのか、あるいはウェルギリウス自身も想定していたのかは定かではない(シレノスとシローの類縁性は首肯できるにせよ、それ以外の二者の見立てには飛躍がありすぎるように思われる)。この問題を考察するためには、ウェルギリウスの註釈史および解釈史に踏み込む必要があるが、現時点では私にはその力も余裕もない。今後の研究の課題とする。

60 ステンノー (強い女)、エウリュアレー (広くさまよう女、ないし、遠くに飛ぶ女)、そしてメドゥーサ (女王) の三姉妹。

61 カミッロはここで、異なる二つの神話を合成している。ただ一つの眼を共有する三人の娘は、ゴルゴーンたちたちの姉妹と見なされるグライアイ (老婆たちという意味であり、パンプレード、エニニューオー、デイノーの三姉妹である) である。ヒギヌス (Astron., II, 12ff) によれば、グライアイたちが所有していた、ただ一つの眼 (およびただ一つの歯) を奪ったのがペルセウスであり、彼はその眼 (と歯) を彼女たちに返すという約束で、ゴルゴーンたちたちのなかでもっとも古く、もっとも恐ろしいとされるメドゥーサを倒すための道具を手に入れる (Eric M. Morman, Wilfried Uitterhove, *Miti e personaggi del mondo classico. Dizionario di storia, letteratura, arte, musica*, Edizione italiana a cura di Elisa Tetamo, 1997, p.589; 神津春繁『ギリシア・ローマ辞典』、岩波書店、1981 年 (第 16 冊)、p.112)。

ボルゾーニ (Bolzoni, in *ed.cit.*, pp.198f) によれば、カミッロは、二組の三姉妹の神話を融合させる際、ペルセウスのメドゥーサ退治に続く神話の細部を想起したかもしれない。メドゥーサを倒した後、ペルセウスは、彼女の首を袋に入れて遁走した。残された二人のゴルゴーンたちは、ペルセウスを追いかけるが、彼がヘルメスからもらった魔法の兜のおかげで、彼の姿を見ることが出来なかった。カミッロは、ペルセウス神話におけるこの細部の逸話を、二人のゴルゴーンたちに永遠にもたらされた盲目という条件へと書き換えたのかもしれない、とボルゾーニは推測している。私も、その可能性を指示する。

62 1550 年のトッレンティーノ版では、この部分には「月」の記号が欄外に記されているだけで、改行がなされていない。ここでは、読みやすさを考慮して改行した。

63 マクロビウス『スキピオの夢について』I, 12.

る、バッカスの杯のイメージがあるだろう。プラトン主義者たちが語るところによれば、この〔地上の〕世界へとやってくる靈魂は、蟹座の扉を通じて降下し、回帰する際には、山羊座の扉を通じて上昇する。そして、蟹座の扉は、人間たちの扉〔porta de gli huomini〕と呼ばれており、これを通じて靈魂は死すべき〔人間の〕身体へと降下するのである。山羊座の扉は〔異教の〕神々の扉〔poeta de' dei〕と呼ばれており、これを通じて、それら〔靈魂〕は、その星座の記号である動物〔山羊〕の本性にしたがって、下から神性へと回帰するのである<sup>63</sup>。そして、蟹座は月の家であり、その知性はガブリエルである。そして、彼〔ガブリエル〕が神に命じられてたびたび降下したので、聖書は、彼を人〔homo〕と呼び、次のように述べている。「人、すなわちガブリエル〔Ecce vir Gabriel〕」<sup>64</sup>。さて、プラトン主義者たちに話を戻せば、彼らは、靈魂は、降下しているあいだに、多かれ少なかれ、バッカスの杯から飲んでしまい、それぞれ飲んだ量に応じて、上にある事物のことをすべて忘れてしまう<sup>65</sup>。したがって、我々は、蟹座と獅子座、そしてそれらのあいだにあって、そこから飲もうとして身を傾けている処女をとともう杯が、もっとも高いところにあり、もっともよく見えるようなやり方で、ひとつの星座を想像して作ろう〔fingeremo〕。そして、このイメージは、その書物のもとに、人間の忘却（それが、いかなるものであるか）を、そしてその必然的結果を、たとえば無知や無教養を保持するだろう。そして、このイメージは月に属する。なぜなら、（先に述べたように）月の家は蟹座だからであり、この乙女は、先に述べた三つのそれすべてを指す一般的な靈魂であると理解しよう。

## 《水星》

水星のゴルゴンたちのもとには、火を点けられた松明のイメージがあるだろう。我々はそれを、プロメテウスがパラスの助力を得て天で点したものとして理解するので、我々は、それが天与の才能〔ingegno〕、すなわち可能的知性ないし受動的知性と、言葉として学ばれるべき従順さ〔la docilita〕とを意味することを望むのである。この松明については、プロメテウスを扱うだろう第七の階層でたつぷりと語ることにする。

---

<sup>64</sup>『ダニエル書』IX, 21.

<sup>65</sup> マクロビウス『スキピオの夢について』I, 12.

<sup>66</sup> クリオネは、ピエリオ・ヴァレリアーノ『ヒエログリフ集』補遺のなかで、蛇にかじられるエウリュディケーのイメージを「人間への欲望」の象徴と見なし、カミッロとよく似た議論を展開している（この書物の正確な書誌については、足達「カミッロ（3）」、p. 9、註14を見よ）。Curione, in *Ieroglifici...*, Di Celio Augusto Curione, *De i Trattati de Gieroglifici...*, libro primo, p.905, "EVRIDICE. L'APPETITO. Evridice, la quale fu da un serpente nel piede morsa, significa l'humano appetito, ilquale gli affetti dell'animo feriscono, & impiagano. Imperoche i piedi, e massime il calcagno sono gieroglifici delle nostre cupidità. E però il nostro Salvatore uolse lauare i piedi de suoi discepoli, accioche da gli affetti terreni gli mo(*sic*) ndasse, & purificasse, & a Pietro, che non uoleua che lo lauasse disse; Se io non ti lauarò, non ha(*sic*) rai parte meco. Et nella sacrata Genesi si legge, che Dio disse al serpente. Tu tenderai insidie al suo calcagno. Nè solo questo leggiamo nelle sacre

## 《金星》

金星のゴルゴーンたちのもとには、蛇によって足を齧られているエウリュディケーのイメージが置かれるだろう<sup>66</sup>。そして、足と、特にそのかかと〔傍点は訳者〕ないし我々の呼び方によればアキレス腱は、我々の意志によって統べられる我々の諸感情を意味するので、我々はこのイメージが人間の意志を含意することを望むのである。それ〔意志〕は、靈魂が有する諸力の一つであり、それから自由に分離したり、しなかったりする。そして、これはさらにネフェスをも含意する。そして、記憶が我々から逃げていかないようにするため、我々は、解剖学者たちが、かかと〔傍点は

lettere, ma ancora nelle fauole Greci, lequali dicono, che Achille pero (*sic*) che ancor fanciullo fu tuf (*sic*) ato nelle acque della Palude Strige, non poteua in parte alcuna esser ferito fuor che ne piedi, iquali non erano stati lauati. Et questo finsero per manifestare che egli sarebbe stato forte, & valoroso, se da proprii affetti non fusse stato superato, & uinto. Ne da questo sentimento è lontano quello che dicono, che Giasone quando andaua a torre il uello d'oro, perche una calza in un fiume, ilquale solo tra tutti i fiumi del mondo da niun uento è offeso, che uuol dire, che mentre che seguita la uirtù, & la immortalita, fu di qualche parte de suoi affetti priuo. Et Vergilio scriue, che Didone quando era per morire, li scalzo d'una calza, con queste parole, Ella con trito furre, e sale sparge / Il sacrificio, e intorno a i sacri altari / Le man pietose al ciel deuota inalza, / Scalza d'un piede e con stretti legami / Cinta la ueste. Gli Dei tutti chiama / Che testimonio dian della sua morte, / E le stelle che'l suo infelice fato / Veggono, e sanno. E questo significa, che ella era spogliata, e libera del timor della morte che è v (*sic*) n'affetto, significato per il piede scalzo, & questa figura di Didone significa ancora vn repentino, e saldo consiglio." 「〔エウリュディケー。欲求。一匹の蛇から足をかまれているエウリュディケーは、靈魂の諸感情が傷つけたり、怪我させたりする、人間への欲望を意味する。なぜなら、足と、そしてそれ以上にかかと〔傍点は訳者〕は、我々の〔肉体的〕愛のヒエログリフだからである。そして、我々の救世主は、彼の弟子たちの足を洗おうとしたが、それは、そうすることによって、地上的な諸感情を洗い、清めるためだった。そして、足を洗わせようとしなかったペテロに、こう言った。〈もし私があなたの足を洗わなければ、あなたは私と関係しなくなる〉〔ヨハネによる福音書〕XIII, 4〕。そして、聖なる創世記では、「神は蛇に向かって言われた。〈お前は彼〔アダムとエヴァの子孫たち〕のかかとを砕くだろう〉〔創世記〕III, 15. 傍点は訳者〕。我々はこれらのかかとを、聖書のなかでのみならず、ギリシャ人たちの諸寓話のなかでも読むことが出来る。彼らは、アキレスがまだ幼子のときに、冥府のステュクス川の水の中に浸され、つからなかつた両足以外のいかなる部分も傷つけられえないものとなったと語っている。そしてこれは、もし自分自身の諸感情〔欲望〕によって乗り越えられ、負かされてしまわなかつたならば、彼〔アキレス〕は強いまま、価値あるもののままであつただろう、ということを示すための物語である。この感情〔欲望〕から遠くないものが、彼ら〔ギリシャ人たち〕が語る、イアソンの感情である。彼は、黄金の羊毛を取りに行ったとき、いかなる風によつても波立たせられない世界中でたったひとつの川の中に、片方の靴を失くしてしまった。これは、美德と不死性の到来にともなつて、彼の感情の中のなんらかの部分が無くなったという意味である。そして、ウェルギリウスは、ディードーが死ぬ間際、片足の靴を脱いで、このように述べたと書いている。〈彼女は、挽かれた麦を手にとり、犠牲を捧げ、聖なる祭壇のまわりに撒いた。哀れな両腕を天に向けて敬虔にも差し伸べ、片足の靴を脱ぎ、きつく結ばれていたその服を緩めた。彼女の来るべき死を見届けてくれるように、彼女の不幸な運命を見て、そして知っているすべての神々と星々に語りかける〉〔ウェルギリウス『アエネーイス』IV, 517 – 20; なお、クリオーネのイタリア語による引用は幾分不正確である〕。これは、彼女が、片足の靴を脱ぐことによって意味される、一つの感情としての死への恐れを取り除かれ、清められたことを意味しており、このディードーのイメージはさらに、思いがけない、しかし確固たる忠告を意味してもいる〕」

67 カミッロは解剖学にも強い関心を示したようである。カミッロは、キケロ主義を批判したエラスムスに反論するために書かれた『模倣論 *Trattato dell'imitatione*』の中で、ボローニャ滞在時代、ある解剖学者の実験に参加した経験を語っている。カミッロは、ここで、人間の身体の構造と、雄弁術の構造とのあいだに平行関係を見



訳者] から下腹部〔lombi〕までのあいだには神経の連絡線〔corrispondenza〕があると述べていることを知るべきである<sup>67</sup>。これについては、二つの聖書がそれぞれに扱っている。このことにつ

出そうとしている。カミッロによるこの議論が、プリニウスによって伝えられる、彫刻家ゼウクシスがクロトンで制作した《ヘレネー》の逸話をその錦の御旗とする「多種多様の手本からの模倣」推奨派（エラスムス、ジャン＝フランチェスコ・ピコ・デッラ・ミランドラ）に対する、「単一の手本（とくにキケロの文体）からの模倣」推奨派からの反論となっている点が注目される。事実、後に引用する記述よりも前に、カミッロはゼウクシスの試みを例外的なものとなす記述をしているのである。キケロ主義的記憶術に要求される個々のイメージは、均整やシンメトリーよりもむしろ、心に残像を残すほど特殊で、異様で、風変わりであるべきだとされる（キケロ流に言うならば「力強いイメージ」たるべきである）。ここに、同時代のいわゆるマニエリスム美術の「変形趣味」との類縁性を見出せないだろうか？ また同様に興味深いのは、カミッロはここで多種多様の身体要素の組み合わせによって生じる異様な形態の生成をいわば反面教師として記述しているのだが、そのイメージ作りの方法それ自体は、まさしくキケロ主義的な「力強いイメージ」の作り方を反復しているという事実である。この興味深く、かつとても重要な問題については、別の機会に詳しく論じたいと考えている。『模倣論』におけるカミッロの記述は以下である。Giulio Camillo, *Trattato dell'imitatione*, in Giulio Camillo Delminio, *L'idea del teatro e altri scritti di retorica* Torino 1990, pp.167–193, esp.p.192– 3, "Ricordami già in Bologna che uno eccellente anatomista chiuse un corpo umano in una cassa tutta pertugiata e poi la espose ad in corrente d'un fiume, il qual per que' pertugi nello spazio di pochi giorni consumò e portò via tutta la carne di quel corpo, che poi di sé mostrava meravigliosi secreti della natura negli ossi soli et i nervi rimasi. Così fatto corpo, dalle ossa sostenuto, io assomiglio al modello della eloquenza dalla materia e dal disegno solo sostenuto. E così come quel corpo potrebbe essere stato ripieno di carne d'un giovane o d'un vecchio, così il modello della eloquenza può esser vestito di parole che nel buon secolo fiorirono o che già nel caduto languido erano. E così come all'occhio dispiacerebbe veder che 'l capo d'un tal corpo fusse vestito di carne e di pelle di giovane, ma il collo di carne e di pelle di vecchio tutta piena di rughe, e più ancor se in una parte fusse di carne e di pelle di maschio tutta virile, in un'altra di femina tutta molle, e maggiormente se avesse il braccio di carne pertinente all'uomo et il petto di quella che si richiede al bue o vero al leone, e non fusse tutta equabile e qual dove (*sic*) rebbe esser nella sua più fiorita età, così sarebbe ingrato all'orecchio et all'intelletto l'udir e l'intender una orazione che non avesse tutte le parti vestite d'una lingua e non fusse tutta a se medesima conforme, e che non potesse esser richiamata ad un secolo. E quando sarà richiamata a quello nel qual ella più che in altro avesse mostro il valor, il vigor e la bellezza sua, tanto più sarà degna di laude; e quanto meno in lei si vedrà a lingua di altra generazione, tanto meno dispiacerà. E nel vero, se la favola di Pelope fusse istoria, credo strana cosa sarebbe stata a veder la spalla sua di avorio et il resto del corpo altrimenti; tal vista farebbe per avventura, e più spiacevole, un satiro, un centauro, un mostro."〔「私はかつてボローニャにいたころを思い出す。そこで、ある優れた解剖学者が、一人の人間の身体を、全体に〔たくさんの〕穴を開けられた箱のなかに閉じ込めて、それを川の流れの中に晒したのである。するとそれは、それらの穴によって、ほんの数日間のうちに身体の肉すべてを崩して、取り去ってしまい、骨のみで、神経が残っているだけの姿となって、それ自体を驚異的に示したのである。このようにして作られ、骨によって支えられている身体を、私は、素材とデザインのみによって支えられている雄弁術の手本に似ていると考えるのである。そして、その身体が一人の若者の肉、あるいは老人の肉によって再び満たされうると同じように、雄弁術の手本もまた、よき世紀〔キケロの世紀という意味〕に花開いた言葉、あるいはすでに衰退して衰えていた言葉を身にまというのである。そして若者の肉と皮を着させられているが、頭部はしわだらけの老人の肉と皮を着させられ、そしてさらに一部分はすべて男らしい男の肉と皮を、そして別の部分は柔らかい女のそれを着させられ、さらにひどいことには、男のものである肉の腕と牡牛や牡ライオンに望まれるような肉の胸を身に付け、そのもっとも花開いた年齢にはあったはずの全身の均整をなくしてしまった身体を見るのが不愉快なことであると同様に、すべての部分に一つの言語を着させず、それ自体としての調和も完全に達成されず、ある世紀〔キケロの世紀〕のことなどとても思い出されないような演説を聴き、理解するのは迷惑なこととなるだろう。そして、他のどの世紀よりもそれ〔演説〕が、その価値、活

力、そして美を有する世紀へと思いをはせるとき、それはますます賞賛に値するものとなるだろう。そして、彼女〔演説〕のなかには他の世代の言語はますます見られなくなっていくだろうし、不愉快さはますます減るだろう。そして、実際のところ、もし、ペロプスの寓話が史実なら、私は、象牙によって作られた彼の肩と元のままの残りの身体を見るのは奇妙なことだったと思う。そのような姿は偶然によって作られるべきものであり、とても不快であり、サテュロス、ケンタウロス、怪物にほかならないのである。〕

ペロプスの奇妙な逸話は、ピンダロス『オリムピック競技勝利歌集〔*Olimpiche*〕』第1歌によって歌われ、さらに、パウサニアス『ギリシャ記〔*Periegesis tes Hellados*〕』第5巻第13章1－7節、アポロドーロス『ギリシャ神話〔*Bibliotekeke*〕』「摘要2」3－10行に記述されている。ピンダロスによれば、ペロプスはタンタロスの息子だったが、神々の自分への関心を試そうとしたタンタロスによって殺され、料理され、神々の食卓に捧げられてしまう。豊穡の女神デメテルだけがその残酷な罠に気づかず、ペロプスの肩を食べてしまう。神々はペロプスを再生させるが、欠けた肩を象牙で作り直してやった。

16世紀前半のイタリア文学における「単一の手本からの模倣」と「多種多様の手本からの模倣」とのあいだの論争については、美術史家エウジェニオ・バットィスティによる先駆的かつ卓抜な論文を参照のこと。Eugenio Battisti, "Il concetto d'imitazione nel Cinquecento italiano", in Id., *Rinascimento e Barocco*, Torino 1964, pp. 175－215.

さらにカミッロは、マルカントニオ・フラミニオへの手紙のなかで、「劇場」の構想以前には、「人体」をモデルとして彼の記憶術体系を構想していたことを、ガレノスの身体論を引きながら、明らかにしている。これは「劇場」の成立過程に深く関わる重要な問題であり、さらなる検討が必要となるだろう。以下を参照のこと。Giulio Camillo, *A M. Marc'Antonio Flaminio*, in Giulio Camillo Delminio, *L'idea del teatro e altri scritti di retorica*, cit., pp. 5－9, esp. pp. 6－7, "È il vero che da una parte avevamo la maniera in alcuno edificio da Cicerone principalmente tenuta; dall'altra quella di Metrodoro ne' dodici segni del cielo, dove trecento sessanta luoghi secondo il numero de' gradi gli erano famigliarissimi. Ma veggendo ne l'una poca dignità, ne l'altra molta difficoltà, et ambedue forse piu alla recitazione che alla composizione acconcie, rivolgemmo tutto l' pensiero alla meravigliosa fabrica del corpo umano. Avvisando, se questa e è stata chiamata picci (sic) ol mondo per avere in sé parti che con tutte le cose del mondo si confacciono, potersi a qualunque di quelle accomodare secondo la sua natura alcuna cosa del mondo, e consequentemente le parole quelle significanti. E come che per la grande vicinà delle parti parrà forse a voi adombrarsi il lume della distinzione, nondimeno, se vedeste come nel libro sono collocate, parebbevi non senza gran meraviglia separatamente vedere, in ordine da non uscire mai di mente, tante arche, o conserve che dir vogliamo, da riporre ciascuna cosa e ciascun modo di dire che nel mondo sia. E che le parti del corpo come luoghi ricevere si possano ci insegna Galeno, il quale, nell'opera che fece delle passioni che alle membra dell'uomo possono avvenire, dice le parti del corpo umano da tutti gli antichi essere state chiamare luoghi."〔「彼の「劇場」の全体の形の手本になりえるものとして〕一方では、キケロによって主として考えられ、なんらかの建物のなかで行うやり方があったことも事実ですし、他方では、メトロドロスの、十二星座のなかで行うやり方があります。そこでは、三六〇もの場所が、階層の数にしたがって配置されたので、彼にはこの上なく覚えやすいものとなったのです。しかし、一方はあまり尊厳性がないし、片や他方はとても難しいということを考えると、どちらも、おそらくは、「劇場」に描かれるべきイメージの〕適切な構図作りよりも、むしろ暗唱〔による記憶術〕に向いているため、我々はすべての考えを、人間の身体という驚異的な建物へと向けることにしましょう。よく考えてみれば、これが、世界のあらゆる事物にとってふさわしい諸部分をそれ自体のなかに持つがゆえに、小さな世界と呼ばれるとすれば、世界のなんらかの事物は、その本性に従って、その〔諸部分の〕それぞれに安住しうるのでし、そして結果として、言葉もその意味にしたがって安住しうるのでし。そして、諸部分がとても近い場所にあるせいで、あなたには、それらを区別するための明瞭さがぼかされるように思われるでしょうが、そうではなく、もしあなたが、本〔il libro : 『劇場のアイデア』における「扉」に相当すると思われる〕の中で、それらがいかんして置かれるかを見れば、大いなる驚異とともにきちんと分割されて見えることでしょう。それらの秩序は、知性からけって外に出て行かなくするでしょうし、多くのアーチ〔archi〕、あるいは私が蓄え〔conserve〕と呼ぼうと思う物によって、世界のなかにある、あらゆる事物とあらゆる雄弁の仕方を引き出すことが出来るでしょう。そして、身体の諸部分が〔記憶術のための〕場所として受け取られうることを、ガレノスは我々に教えています。彼は、人間の四肢に生じうる諸

いて、キリストは、我々の諸感情と我々の意志が純潔なものとされ、清められるべきであるという意味で、こう述べられた。「腰に帯を締めよ」<sup>68</sup>。そして、彼はまた、彼の出発に際して〔使徒たちの〕足を、すなわち使徒たちの諸感情を洗ったのである。この足洗いにペテロは賛成しようとしなかったが、〔キリストは〕彼にこう言った。「もし私があなたの足を洗わなければ、あなたは私と関係しなくなる」<sup>69</sup>。そして創世記の中では、こう書かれている。「お前〔蛇〕は彼〔アダムとエヴァの子孫たち〕のかかとを砕く」〔傍点は訳者〕<sup>70</sup>。ギリシャの諸寓話の中では、幼子のころのアキレウスが、冥府の〔ステュクス〕川の水に浸され、全身のあらゆる部分が無敵になったが、足だけは例外で、彼は足を掴まれていたのでそこには水がつからなかったのである。これは、多くの人間が、諸感情に突き動かされない限りは、あらゆる部分で質実剛健でありえたということの意味する。黄金の羊毛を奪いに行ったとき、風に吹かれることのない世界でただ一つの川のなかに片方の靴をなくしてしまったイアソンの秘儀も忘れてはならない<sup>71</sup>。それに触れるたびに大地から力を得たというアンタイオスの足については、その箇所<sup>72</sup>で述べることにしよう。

## 《太陽》

太陽のゴルゴーンたちのもとには、黄金の枝のイメージが置かれるだろう。そしてこれは、我々にとっては、媒介的知性、ネッサマー、一般にいうところの靈魂、理性的靈魂、スピリトゥス、そして生命を意味するだろう。

## 《火星》

火星のゴルゴーンたちのもとには、片足を裸足にし、結び目をほどかれた衣を身に着けた一人の娘のイメージがあるだろう。そして、これは、熟考すること〔*deliberatione*〕、あるいは物事に動じず、かつ速やかに生み出される意志を意味するだろう。これは、助言を得て同じことを行うこととしての熟考とは異なるものであり、そちらは木星のものである。そして、結び目をほどかれた衣を着ていることと、裸足であることは、〔それぞれ〕下腹部〔から、かかとまで続く神経の連絡線〕

---

感情を取り上げた著作のなかで、人間の身体の諸部分はあらゆる古代人たちによって、「場所〔*luoghi*〕」と呼ばれていたと述べているのです〕

なお、足達「カミッロ（１）」の解説部分の註２で、『著作全集』に含まれていたこの書簡について、言及することを怠ってしまった。お詫び申しあげ、ここに訂正したい。

68『ルカによる福音書』XII, 35. なお、ウェンネカー（Wenneker, *An Examination of L'Idea del Theatro of Giulio Camillo...cit.*, p.309）は、この一文を訳し忘れている。

69『ヨハネによる福音書』XIII, 8.

70『創世記』III, 15.

71 イアソンの逸話については、以下を参照のこと。アポロニオス『アルゴナウティカ』I, 6－11（アポロニオス『アルゴナウティカ』岡道男訳、講談社文芸文庫、1997年、p.10、「サンダルの片方だけをはき、民のあいだから来る者を見たとき、彼はこの者の企みによって滅ぶだろうと。その後まもなくあなたの予言に従いイアソンは、冬アナウロスの流れを徒歩で渡ったとき、サンダル片方は泥から引き抜いたが、片方は河底に、あふれた水にとられてそのまま残した」）。

についての説明<sup>73</sup>、およびイアソンの裸足として理解される。そしてこのイメージは、ディードーが行った、揺らぐことのない確固たる死に関する熟考の中でウェルギリウスが我々に表現してくれたものである。彼は彼女について語りながら、彼女は「片足の靴を脱ぎ、きつく結ばれていたその服を緩めた」と述べている<sup>74</sup>。そして彼から、我々はこのイメージを借りたのである。

## 《木星》

木星のゴルゴーンたちのもとには、一羽の鶴のイメージがあるだろう。それは、口にメルクリウスの杓〔カドゥケウス〕を咥えて天に向かって飛び、両足のあいだから矢筒が落ちて行くにまかせている。そこからは矢が飛び出して、下に向かって空気の中に散らばっていく<sup>75</sup>。これを私は、古代のメダイヨンの裏面で見たとある<sup>76</sup>。そして鶴は、覚醒している靈魂〔l'animo vigilante〕を意味するだろう。それは、この〔地上の〕世界とその諸欺瞞によってかねてより疲れ果てており、平静な状態を得るために、メルクリウスの杓を、すなわち彼の平和と平静な状態を口にくわえながら、天に向かって飛ぶのである。そして、足のあいだから矢とともに矢筒が落ちているが、それらは、この世界への慰めを意味する。このイメージには、詩篇の中の次の一節も一致する。「鳩の翼が私にあればどうしましょう？ 飛び去って宿を求めましょう」<sup>77</sup>。これを、ペトラルカは、ひとつのソネットへと翻案し、鳩の翼は休められ、地上から飛び立つべきであると歌ったのである<sup>78</sup>。この優しいイメージは、我々にとって、選挙、審判、そして助言を含意するだろう。そして、このイメージは、静かで、善意に満ち、落ち着いた知性〔mente composto〕を有する惑星である、木星に与えられる。

## 《土星》

土星のゴルゴーンたちのもとには、アンタイオスを胸の上に持ち上げるヘラクレスのイメージがあるだろう<sup>79</sup>。ヘラクレスは人間のスピリトゥスであり、アンタイオスは身体である。ヘラクレス

---

72 パーシパエーの階層の章。

73 下半身からかかとまでつながっていたといわれる神経の「連絡線」についての既出の記述を参照のこと。

74 ウェルギリウス『アエネ이스』IV, 518.

75 古典的記憶術のイメージ連想法の影響を感じさせる記述となっている。

76 この古代のメダイオンは、あるいは貨幣のことかもしれない。ボルゾニ (Bolzoni, in *ed.cit.*, p.199, nota 48)、およびウェンネカーとその協力者であるジョアン・マーティン (Wenneker, *An Examination of L'Idea del Theatro of Giulio Camillo...cit.*, p.385, note 1) も、その可能性を示している。いずれにせよ、カミッロが見たという作品は今だに同定されていない。

77 日本語版聖書では『詩篇』LV, 7.

78 Francesco Petrarca, *Rerum vulgarium fragmenta*, Sonetto 81, "Io son sì stanco sotto 'l fascio antico / De le mie colpe e de l'usanza ria, / Ch'ì temo forte di mancar tra via, / E di cader in man del mio nemico. / Ben venne a dilivarmi un grande amico / Per somma et ineffabil cortesia; / Poi volò fuor de la veduta mia, / Si ch'a mirarlo indarno m'affatico. / Ma la sua voce ancor qua giù rimbomba: / "O voi che travagliate, ecco 'l camino; / Venite a me, se 'l passo altri non serra. / Qual grazia, qual amore, o qual destino / Mi dara penne in



の胸は知恵と節度とが座する場所である。これら二つは（パウロが言うように）戦い続け、終わりのなき闘争を繰り返す。なぜなら、肉は常にスピリトゥスに対抗して上に上がろうとし続け、スピリトゥスは常に肉に対抗して上に上がろうとし続けるからである<sup>80</sup>。身体を大地からはるかに遠ざけて、足、すなわち諸感情を用いて母〔大地〕から力を受け取ることをできなくさせて、強く抱きしめて、殺してしまわないかぎり、スピリトゥスはその戦いの勝者にはなりえないのである。これについて、我々が主に考察しなければならない二つの事柄がある。一つは身体の死であり、他方は、いわば身体のスピリトゥスへの変容である。真実として、もし我々の身体が諸感情の死によって死ななければ、スピリトゥスに変わることも、キリストの中に一体化することもありえない。この死について、パウロはこのように話している。「あなた方は死んだのであって、あなた方の命は、キリストと共に神のうちに隠されているのです」<sup>81</sup>。そして、ダヴィデはこう語る。「主の慈しみに生きる人の死は主の目に価高い」<sup>82</sup>。そして、詩篇の六二歌の中では、肉が、霊と匹敵するほど、神に対して自分の欲望を向けるということを読むことが出来る。「私はあなたを捜し求め、私の魂はあなたを渴き求めます」<sup>83</sup>。そして、パウロは、フィリピの信徒への手紙の第三節ではこう語る。「神は、私たちの卑しい肉体を、ご自分の栄光ある肉体と同じ形に変えてくださるのです」<sup>84</sup>。そしてキリストは、小麦の死との類似性に基づいてこう語る。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、

---

guisa di colomba, / Ch'l' mi riposi, e levami da terra?" [ペトラルカ『俗語詩集』81番（ソネット）、「私の罪深さと、悪習の古くて重い薪を／背中に負って疲れ果てた私が、／恐れるのは道の途中で息絶え、／私の敵の手の中に落ちること。／私を助けに現れた偉大な友人は／偉大で語るすべを持たないほどの雅さを持ちながら／私の視界から離れて飛び立ち／私は懸命にそれを追いかけたが、骨折り損なのだ／しかしその声は今でも大地に響き渡っている／「ああ、悩めるあなたたちよ、ここに道がある／もし他の道が塞がるなら、私とともに来たまえ」と。／いつの日か、恩寵が、愛が、運命が／私に鳩のごとき翼をくれるだろうか、／私を休ませ、大地から飛び立たせる翼を？」]（邦訳は、ペトラルカ『カンツォニエーレ』池田廉訳、名古屋大学出版会、1992年、p.149。なお、ここでの訳は、それを参照しつつ、より率直に訳しなおしたものである）。

79 フランチェスコ・ジョルジョ・ヴェネトは、『自作詩およびそれへの註釈』の序文で、ヘラクレスとアンタイオスについて、このように記している。カミッロはそれを参照した可能性が高い。Francesco Giorgio Veneto, *L'Elegante Poema...*, cit., p. 6, "...le superiori per occolte vie (a guisa de la calamita) mentre vogliono unirsi, a sé tirano le terrene da la loro bassezza. Il che fu dato a veder sotto'l simbolo di Hercole, che leva da la terra Anteo figliuol di quella, e tanto anchor lo stringe sopra'l petto, il qual è seggio de la sapientia, che l'uccide." [「……上位の諸事物が結合を欲する際には、自らのもとに、秘されたいくつかの道を通じて（まるで磁石のように）低いところから地上の諸事物を引き上げるのである。このことは、ヘラクレスの象徴のもとに理解された。彼は大地の息子であるアンタイオスを大地から持ち上げ、さらに胸の上で、つまり知恵の座す場所の上で締め付け、殺すのである」]

80『ガラリヤの信徒への手紙』V, 16 – 17.

81『コロサイの信徒への手紙』III, 3.

82 日本語版聖書では『詩篇』CXVI, 15.

83 日本語版聖書では『詩篇』LXIII, 2.

84『フィリピの信徒への手紙』III, 21.

85『ヨハネによる福音書』XII, 24 – 25.

86 Francesco Petrarca, *Rerum vulgarium fragmenta*, Canzone 28, 77 – 78, "Volando al ciel conla terrena somma."（邦訳『カンツォニエーレ』前掲書、p.46）

一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」<sup>85</sup>。そして、我々の解釈はまだ続けられるであろうにしても、我々によって提示された二つの事柄のうちのもう一つである変容について見ておくべきだろう。ペトラルカは、次のように言うさいに、優しくこのことに触れている。〔身体は〕

地上の重荷を背負って、天へとはばたく。<sup>86</sup>

この変容は、三人の盲目の娘たち〔ゴルゴーンたち〕の中にもはっきり示されている。彼女たちは、自分自身のものではなく、その外にあるたった一つの眼を持っていたので、おたがいにそれを納得づくで貸し与え、合体し、一つの同じ事物に変化する。これはちょうど、天使によって引っ張られるネッサマーが、ルアフを引っ張り、そしてルアフはネフェスを引っ張ることと同じである。そして、このようにして、スピリトゥスの変容がなしとげられるのである。さて、このイメージは、ヘラクレスが行う締め付けの強さと、大地から高みへと引き上げる力を意味するために、その中では、靈魂が天から受け取る印象〔impressioni〕、記憶、科学、意見、実践的理性、すなわち理解すること、思考〔pensamento〕、想像力、そして瞑想のような〔内的人間の〕諸部分に属する、あらゆる事物が識別されるような一冊の書物を含むだろう。そして、このイメージは土星にふさわしい。なぜなら、第一に、ピナーの、すなわち知性〔intelletto〕という超天界における尺度〔misura〕は土星に共通するものだからである。第二に、どちらも固定された事物だからである。この扉のもとには、さらにもう一つのイメージ、すなわち、山羊座を通じて上昇する一人の娘もあるだろう。それは、靈魂の天への上昇を意味するだろう。そしてこのイメージは、山羊座が土星の家なので、土星に与えられるのである。